役に立たない聖剣伝説

誠一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
役に立たない聖剣伝説

【Ｎコード】
Ｎ５７９６Ｚ

【作者名】
誠一

【あらすじ】
ある世界で勇者と魔王の戦いがあった。
その世界を救った聖剣が地球のとある場所に落ち、ある少年と出逢う。
やる気の無い少年が聖剣を手にし悪と戦う……のか？

第1話　勇者と聖剣

対峙する二人。

一人は鎧姿の青年。
金髪に精悍な顔立ち。装飾の鮮やかな大剣を構えている。

もう一人は異形の姿をした男。
青い肌に頭から二本の角。背中からは漆黒の翼。

青年は勇者と呼ばれ異形の男は魔王と呼ばれている。
この世を支配しようとした魔王にそれを阻止しようとする勇者。

お互い傷だらけで息も絶え絶え。

何れ御伽噺になるであろうこの戦いも終焉を迎えようとしていた。

「よクゾ人ノ身で我ヲここまで追イ詰めタ」

「……」
魔王は愉快そうに言うが勇者は黙ったまま。

「ダがこレで最後ダ。わレに刃向カった愚かサを後悔すルガイイ！！」
魔王は両手を前に翳す。
黒い霧のようなものが出現し球体となっていく。

『これで決着がつくぞ』
勇者の頭の中に声がする。

「ああ、解ってる」
大剣を持つ手に力が入る。
この声は勇者が持つ大剣、聖剣グルバァニアのものだ。

『お主と出逢ってからもう二年か。最初の頃はただの坊ちゃんだったのにのぅ』

「今それを言うなよ」

『……しかし今のお主は紛れもない勇者だ。我が保証しよう』

「ありがとう。でもその言葉は終わってから受け取るよ」

「デわ死ヌがイイ！！」
無音でその黒い球体は勇者に向かって飛んで来る。

「うりゃあぁぁぁ！！」

ギィギャッ！！

黒い球体と聖剣グルバァニアがぶつかり凌ぎ合う。

「ぐぐぐ…」

『踏ん張れ！！』

「ふハはは！！無駄ダ諦メろ！！」

「ぐぐぐ……はあぁぁぁ！！」

パァッンと水風船のように黒い球体が弾ける。

「何ダと！？」

「やあぁぁぁー！！」

驚愕する魔王の隙を逃さず勇者は聖剣を突き立てる。

「ぐフっ……」

聖剣は魔王を突き刺した。

勇者が聖剣引き抜くと魔王は仰向けに倒れた。

「やった……のか？」

『うむ。見事だ』

「終わった……」

勇者は膝を付き安堵の溜め息をする。

『これであの姫さんと結婚出来るな？』

「な、何を！？僕は別に姫様の事なんか…」

『照れるでない。若いのぅ』

「いい加減にしろよグルバァ！！」

『ほっほっほっ……む？何だこの魔力は』

「どうかしたのかグルバァ？」

『妙な魔力が……！？上を見ろ！！』

「何だあれは！？……」

上を見ると黒い渦が出現していた。

「フ……ハはハ…たダデは死なヌ…我の手ニ入れラれヌなら滅ボすまデ……」

そう言い残し魔王は息絶えた。

「グルバァこれは…」

『膨大な魔力で造られた渦だ。全てを飲み込む渦……この世界も』

「そんな事させるかぁ！！」

『止めろ！！』

渦に向かおうとする勇者を止める。

『お主まで吸い込まれるぞ！！』

「じゃあどうしろと言うんだ！？黙って見ていろと言うのか！！」

『我をあの渦に投げ入れろ』

「グルバァ！？」

『今ならまだ我の力であの渦を消す事が出来る』

「グルバァは、グルバァはどうなるんだ！？」

『恐らく消滅じゃろうな』

「そんな……」

『勇者よ！！』

「！？」

『お主の使命は何じゃ？』

「……この世界を救う事」

苦しそうに言葉を吐き出す。

『ならば使命を全うせよ』

「グルバァ……」

『そんな情けない声を出すでない。それに平和になれば我は無用の長物になる。これで良いんじゃよ』

「また会えるよな？」

『……多分の』

「はあぁ！！」

投げると聖剣は一直線に渦の中心へ消えていった。

「またなグルバァ……」

第2話　少年と聖剣

とある県のとある町。

何の変哲もない住宅街を歩く一人の少年。
名を五月女（サツキメ）　青（アオ）中学2年。
身長、成績、運動神経は平均的。
何時も無愛想で機嫌悪くしているようにしているが、本人曰わくこれが自然なのだそうだ。

授業が終わり今現在青は帰路に着いている。
自宅は二階建ての一軒家。
両親は共に海外へ転勤中。
勿論両親は一緒にと思っていたのだが青は日本に残ると主張した。
幸いにも家のローンも無く青自身もしっかりしており、両親はそれを了承した。

自宅に到着し鍵を開ける。
待つ人の居ない家は当初寂しかったが今は何ともない。
青はカバンをリビングに放ると台所へ行き米を研いで炊飯器のスイッチを入れる。
次に冷蔵庫から冷凍された鶏肉を取り出し電子レンジで解凍する。
こうして前準備をしておけば後は適当に料理するだけである。

米が炊けるまで一眠りしようと二階にある自分の部屋へ向かう。
扉を開け中に入る。
机にベッドに本棚と変わり映えしない何時もの部屋なのだが今日は違っていた。
部屋中に木の破片が散らばりかなり汚れている。

天井を見る直径５０センチ程の穴が開いており赤みがかった空が見える。
そして恐らくその穴を開けた原因の物が床に刺さっていた。
長さは約１８０センチ。刃幅は２０センチはある両刃。柄の部分には竜らしき彫刻がしてある。

剣である。
それもかなり大きさの西洋風の大剣。

青は携帯電話を取り出し何処かへかける。

「……叔父さんですか？屋根の修繕を頼みたいので工務店を紹介して欲しいのですが。……はい、ありがとうございます」
携帯をしまいベッドから枕を取り部屋を出て……

『待たんか坊主！！』
不意にした声に青は辺りを見渡し首を捻る。

「気のせいか…」

『違うわ！！お主の目の前におるじゃろう！？』

「剣？」

『そうじゃ。全く…こんな状況を無視するとは…』

バタン。

『おぉい！？出て行くな！？説明をさせんか！！』

『あの扱いは非道いではないのか？』
あの後青は喚く剣を無視しリビングで一眠りし夕飯を食べ、部屋に戻ってきたのは3時間後だった。

「……やっぱり剣が喋ってる」
改めて青はこの事実に驚いた。
時間を開けて部屋に戻って来たのも実は動揺していたからだ。

『我は聖剣グルバァニア。坊主、名は？』

「五月女　青」

『ではアオ、ここは何処なのだ？』

「此処は……」
聖剣グルバァニアと青はお互いの世界、立場を説明した。

『むう……つまりこの世界は異世界と言う事か』

「……」
現状を理解した一本の剣と一人の少年。

端から見ればかなり異様な光景である。

『アオよ、力を望むか？』

「…と言うと？」

『我は悪しき者を滅する存在。アオがそれを望むなら…』

「結構です」

『力を……って、断るの早いな！？』

青は興味なさそうにアッサリと断る。

「大体悪しき者って何？」

『簡単に言えば人々の安泰や平和を乱す者だ』

「う～ん…」

青が思い浮かべるのは暴力団や犯罪者。海外ならマフィアなど。

「具体的に何が出来るの？」

『よくぞ聞いてくれた。我の力を得れば常人ではなし得ない能力を保有出来る。鳥のように飛べ、岩をも切り裂き、魔法も行使出来るようになる』

「つまり僕に人殺しをしろと？」

『悪を滅するのならば仕方あるまい』

青は再び携帯電話を取り出し何やら調べ始める。

『何をしておるのだ』

「最近屑鉄の値段が上がってるって聞いて」

『……何！？我を屑鉄にするつもりか！？』

「あんたみたいな物騒な物置いとけないよ」

『嘘じゃろ？ほれこのように意志があって話すのじゃぞ？その我を屑鉄にするのは罪悪感があるじゃろ？』

「そこはスッキリ割り切るよ」

『酷いぞお主！！人殺しは嫌な癖に我は平気なのか！？この剣殺し！！』

「現代っ子ってそんなもんだよ……おっあった、意外と近いな」

『！？止めてくれ頼む！！』

「……解ったよ」

流石に可哀想になり携帯電話をしまう青。

『もうそんな事は言わん。じゃから此処へ置いてくれまいか？』

「何でまた？他に勇者をやってくれそうな人を捜せばいいんじゃないか？」

『我は動けないから捜しようが無い。それに此処に落ちたのも偶然

とは思えんのだ、恐らく何か理由がある筈なのじゃ』

「ふ～ん、別にいいけど。でもあんた大きくて邪魔だから物置にしまうよ」

『聖剣を物置に……向こうの世界では我の神殿があったのに…』

「嫌なら屑鉄……」

『嫌ではない！？それに場所は取らせん』

するとグルバァニアは眩い光を発しブレスレットに姿を変えた。

『どうじゃこれなら邪魔にならんじゃろ？』

「まあこれならいいかな」

『ではこれからよろしくの』

「ああよろしく」

パタン。

カチャ。

青はそのブレスレットを机の引き出しに入れ鍵を閉める。

「さて寝ようかな」

何やらまたグルバァニアが喚いているが青は気になったせず眠りについた。

第3話　学校と聖剣

「ふわぁ…」

翌朝。
何時ものように家を出る青。
中学校までは徒歩で十五分。坂道が多く青にとっては毎朝憂鬱な道のりだった。

『これから勉学に励もうとする者が欠伸などするな。我が居た世界では限られた者しか出来ない事なのだぞ？大体お主は……』

「あのどぶ川に捨てるよ？」

『……ただの独り言ではないか』
何時もと違うのは青の左手首にブレスレットがしてある事。
今朝起き、青が学校に行くと聞いたグルバァニアは自分も連れて行けと喚きだした。
無視するつもりだった青だが余りのしつこさに連れ行く事にしたのだ。
しかし既に後悔していたが。

青の通う中学校は桜華中学校と言う。
春になると学校の外周に植えてある桜が咲き、外からだと校舎が桜

に埋もれているように見え中々壮観な風景になる。
だが桜が散った後の掃除がかなり大変で生徒達からはこの桜は不評である。

校門の前では生徒会が朝の挨拶と服装の点検をしている。

「……」

「待ちなさい五月女君！！」
その生徒会の面々を無視し校門を通過しようとした青だったが女生徒に呼び止められる。

「挨拶位出来ないんですか！？」

「どうも…」

「どうもは挨拶ではありません！！」

「朝からフルパワーですね会長」

「全く……何時も何時もお腹の空いた某孫〇空みたいね」
「そこは某ワン〇ースのル〇ィの方が良くないですか？」

「うるさいわね、私は悟〇の方が好きなのよ」
顔を赤らめソッポを向く。
彼女はこの桜華中学校の生徒会長、御手洗（ミタライ）　朱美（アケミ）。
長身で黒く長い髪に若干のつり目から凛々しく見える。
だが愛嬌もあるため男女問わず生徒達から人気がある。

そんな朱美と青は毎朝のように話すのだが、今朝のような会話が殆どなのだ。
青の服装と覇気の無さを注意する朱美にローテンションのまま返答する青。
望まないが朝の恒例行事となっていた。

「んじゃ会長」

「待ちなさいって！！……ん？五月女君あなた手首に何付けてるの？」
そのまま校門を通り抜けようとした青だったが手首にしているブレスレットを見つけた朱美が呼び止める。

「これですか？親戚のお土産です」

「余計な装飾品は校則違反よ！！」

「良かったら差し上げますが？」

『アオ！？お主、我を捨てるのか！！』
当然グルバァニアの声には答えず青はブレスレットを外し朱美へ差し出す。

「要りません。預かっときますから放課後に生徒会室まで取りに…」
ブレスレットを取ろうとした朱美の手が止まる。

「会長？」

「まあいいです。行って下さい」

「はあ…」
何故かブレスレットを没収しなかった朱美は青をあっさり解放する。

『なんじゃ？』

「さあ？気が変わったんだろ」
青はさして気にせず校舎内へと足を向けた。

青のクラスである２Ｃには既に半数以上の生徒達が来ていた。
青は窓際の一番後ろの席にカバンを置きぼうっと外を見だす。

「いっよぉ青！！」
「青君おっはよー！！」
やたらと元気な声が青に掛けられる。

「……やあ」

「相も変わらず低空飛行なテンションだなお前」
ポンポンと青の肩を叩く男子生徒、湊川（ミナトガワ）　緑也（リョクヤ）。
某ジャ〇ーズにいても可笑しくない美少年だが何処か軽薄そうに見える。

「あんたが朝から五月蠅すぎるのよ」

ぺしっと緑也の頭をはたく女生徒、西（ニシ）　桃子（モモコ）。
茶色がかったショートヘアーに大きな瞳は愛らしく小動物を彷彿させる。

「あら、青君それ何？」
桃子がブレスレットに気づく。

「叔父さんの土産でね」

「へえ～珍しいね青君がそういうの付けるの」

「何となくね」
桃子の言葉通り青が装飾品の類を身に着ける事は殆どない。

「に、しても地味だなぁ」
緑也がマジマジとブレスレットを観察して言った。
確かにグルバァニアが身を変えたブレスレットは銀色で彫刻も何もされてない物。

「安物だからじゃないかな」

「そうかな？私は結構好みだよ」
桃子はブレスレットを興味深そうに見ている。

「ならあげようか？」

『アオよ、お主そんなに我が邪魔か？』
悲しそうなグルバァニアの声が青の頭に響くがまた無視しブレスレットを桃子に差し出す。

「え？いいよ！？いいよ！？青君が持っときなよ」
「何顔赤くしてるんだ桃子？……へぇお前青の事……」
「黙れぇこの軽薄男！！」
「ぐぼぉ！？」
何かを言いかけた緑也の腹に桃子のボディーブローが突き刺さる。
「良いボディーブローだなぁ西さん」
『お主出る言葉がそれか？』
そんな事をしていると始業のチャイムが鳴り散らばっていた生徒達は席へ戻って行く。
「もうこんな時間？ほら緑也、席に戻るわよ」
緑也の襟元を掴み引きずりながら桃子も席に戻って行った。
『しかしお主にも友人が居ったのだなぁ』
意外そうにグルバァニアは言う。
今までの青の言動から友人等は居ないだろうと思っていたのだ。
「ただのクラスメートだよ」
が、青はあっさり否定する。
『だが親しげに話していたではないか』
「あの位はクラスメートだったら普通だよ」
『そうは見えんかったがのぅ』

「確かにあの二人は嫌いじゃない、でもそれだけだ」
青は何事もないように言った。

昼休み。
青は一人屋上に来ていた。
屋上にはちらほら数人の生徒がいる。

『しかしこの世界の者達は皆ああなのか？』

「どういう意味？」
青は自分で作った弁当をつっつく。

『我の世界ではそれこそ皆死に物狂いで勉学に励んでいる。なのに此処ではやる気が感じられん』

「まあ中間テストが終わった、てのもあるけど」

『しかしだな…』

「それにアンタの世界とは状況が全然違うんだよ」
グルバァニアの世界では先程言った通り限られた者しか学校のような施設に入れない。内容も厳しくある一定以上の成績を残さないと身分に関係なく退学になってしまう。

そうなってしまうと地位の高い職業に就く事が出来なくなってしまうのだ。

「この世界じゃ学校に通う事が当たり前だから。当たり前の事にいちいち緊張したり必死になる奴は居ないよ」

『むう……』

グルバァニアは納得してないようだがそれ以上言わないようだ。

「一人？」

姿を見せたのは朱美だった。

「ええ、そうですけど」

「話し声が聴こえたものだから」

「ああ…独り言です。僕、根暗なもんで」

「自分で言うもんじゃないわよ。隣良い？」

「はい」

青が了承すると朱美は隣に座りペットボトルの紅茶を一口飲む。

「五月女君そのブレスレットもう一度見せて貰っても良い？」

『アオよこのおなご何か……』

「どうぞ」

『人の話を聞けぃ！！』

ブレスレットを受け取った朱美は手のひらに置く。
「……ふぅん。ねえ五月女君」
朱美の雰囲気が変わる。
何時もの凛々しさから歳に似合わない妖艶な笑みを浮かべる。
「あなた私と付き合わない？」
「嫌です」
いきなりの朱美の告白だったが青は全く動揺せず断る。
「……少しは慌ててくれるかと思ったんだけど？」
「本気とは思えなかったので」
「心外ね、私は……」
朱美は青に寄りかかり顔を近づける。
「青君こんな所に居たー！！」
しかしこの声に朱美は青から離れ立ち上がる。
「偶には一緒に昼ご飯食べようよ……」
駆け寄って来たのは桃子だった。
笑顔の桃子だったが朱美を見た瞬間表情が険しくなる。
「あら西さん」
「……どうも会長」
対峙する二人。
妙な緊張感が屋上を満たし他の生徒達は逃げるように校舎内に戻っ

て行く。
ただ青は我関せずに弁当を食べている。
「珍しいですね、会長がこんな所にいるなんて」
「ちょっと五月女君に用事があってね」
「何の用事ですか？」
「あなたに言う義務はないと思うけど？」
「……」
「……」
無言で向かい合う二人。
相変わらず青は弁当を食べ続ける。
『アオよ、よくこんな状況で呑気に飯が食えるのぅ』
「僕には関係ないだろ？」
『いや明らかにお主関係じゃろ…』
「私、生徒会室に行かなきゃいけないからこれで」
朱美は歩きかけ振り向く。
「五月女君、さっきの話考えておいてね」
そう言い残し去って行った。

「青君あの人と何の話してたの？」

「世間話だよ」

「本当に？」

「ああ」

桃子に嘘をついたのは何か考えがある分けではなく、単に面倒なだけ。

桃子と朱美は何故か仲が悪く会う度に先程のような感じになってしまう。

他人の喧嘩は気にしない青だが巻き込まれるのは嫌なのだ。

「ふ～ん…まあいっか。青君一緒にお弁当食べよ」

「ご馳走様」

「えー！！もう食べちゃったの！？」

「それにもう昼休み終わるよ？」

「後三分しかない！？」桃子はガックリとうなだれた。

授業が終わり青は帰路についていた。

『今日は中々興味深かったのぅ』

「ふぅん…」

『アオよ、お前アケミとか言うおなごの事はどうするのだ？』

「別にどうもしない」

『阿呆かお主！！あのような年若きおなごが告白を無碍にするのか』

「……」

『大体お主のような無愛想で面白味もなく活力のない男があのような美人と付き合えるなど奇跡に近い事なのだぞ』

青は携帯を取り出し操作する。

「……」

『何をしとるんじゃ？』

「……骨董屋の場所」

『骨董屋？』

「古い品物を扱う店」

『ぬお！？我を売る気か！？』

「１５００円なら御の字だけど」

『どの位の価値か解らんが絶対安いじゃろー！！』

第４話　魔法少女と聖剣

雲一つない空には満月が浮かぶ。

時刻は２２時過ぎ。

青は何時も学校へ通う道を歩いていた。

『全く、お主のような若者がこんな夜更けに外を出歩くなど…』

「いい加減にしてくれない？いちいち説教するの」

『若者に苦言をするのは年寄りの性じゃよ』

「因みに幾つ？」

『大体１２００歳位じゃろうか』

「それ年寄りってレベルじゃないだろ」

学校へ着き守衛室で署名し教室の鍵を受け取る。

忘れ物を取りに来たのだ。

『所で何を忘れてたんじゃ？』

「弁当箱」

『そんな物明日でも良いではないか』

「こびりついたご飯粒を甘く見るなよ。水に浸けとかないと洗うのが大変なんだ」

教室に着き自分の席から弁当箱を取る。

『……ん？何か妙じゃの』

グルバァニアが訝しげな声を上げる。

しかし毎度の事ながら青はそんなグルバァニアを気にせず教室の外へ出る。

「……」

『こ、これは！？』

青は無言で立ちすくみ、グルバァニアは驚愕する。

教室を出た廊下には人の様な物がフラフラとさ迷っていた。

まるで人の形をした黒い霧のようだ。

「あれが何か解る？」

『解らんが少なくともあれからは悪意しか感じん』

見えるだけで数は十体以上。

「……気づいたみたいだ」

それは青の存在を認識したのかユックリと向かって来る。

歩みは遅いが廊下の隙間が無くなる程に数を増やし逃げる事も出来ない。

『拙いのぅ……アオよこうなれば…』

「ああ」
青はペタンと座り込む。
「諦める」
『我を使い……ってなぁ！？』
「１４年か……思ったより短い人生だったなぁ」
『阿呆かお主！？諦めるのが早過ぎるわ！！』
「人はいつか死ぬんだよ。それが今だってだけ」
達観しきった表情を浮かべる青。
『我を使え！！我の力を使えば何とかなる筈じゃ！！』
「……えー」
『何故この状況で不満がる！？』
「だって剣なんて危ないし。怪我しそうで…」
『戯けかお主！！このままだと怪我では済まんのだぞ！？』
「父さん母さん先立つ息子をお許し下さい……」
『遺書書く暇があるなら戦わんかー！！』
青に襲い掛かる人の形をした黒い霧。

「ピンキーフラァァシュッ！！」
しかし、突如この声と共にそれらは全て霧散し消えてしまった。
「このピンキーウィングに勝てると思っているの……？」
その声の主と青の目が合う。
白とピンクを基調としたヒラヒラした服。胸元には大きなリボンがありミニスカート。背中には白い二対の翼。
言うなれば日曜の朝に放送している某プ〇キ〇アに似ている。
そしてその顔に青は見覚えがあった。
クラスメートの西　桃子だった。

「……」
「……」
無言のまま時間が経過する。
青は無表情のままだが、ピンキーウィング（笑）こと桃子は顔を引きつらせプルプルと震えだす。
「助けてくれてありがとうございます。ピンキーウィングさん」
スッと立ち上がった青は頭を下げ礼を言って帰り出す。
『のぅアオよ。あれで良いのか？』
「お礼は言ったよ？」
『まあそうじゃが……』
青が学校を出た後校舎から少女の悲鳴が聞こえた。

「青君ちょっといい？」

翌日。
登校した青が自分の席に座っていると、神妙な顔つきの桃子が近付いて来た。

「いいよ」

桃子が先導し二人は屋上に出る。
昼休みだと他の生徒がいるのだが、流石に朝から屋上に来る生徒は居らず今は二人だけ。

「昨夜は驚かせてゴメンね」

「あー……うん」
それほど驚いていない青だったがここは同意する。

「実は私……魔法少女なの！！」

「……へー」
『何と！？このおなご魔法を使うのか！？』
桃子の告白に青は特にリアクションをせず反対にグルバァニアは驚

いている。

「私の家は代々あの『黒闇人(コクアンジン)』を退治しているの」

「黒闇人ってあの人の形した変な奴の事？」

「うん。あれは人の悪意とか負の感情が形になった存在で、放って置くと人に取り憑いて狂暴化して犯罪を起こす」

「そうだったんだ」

『ふむそれはまた面妖な』

「西さん一つ聞きたいだけど」

「答えられる事なら答えるよ」

「何であの格好なの？」

「お母さん……」

桃子は言いにくそうに呟く。

「？」

「お母さんの趣味なの…」

『趣味？』

「私の家系は『黒闇人』に対抗する力があるの。その力は言ってみれば魔法みたいで、お母さんがそれならその力に見合う格好をしなさいって……」

「西さん？」

「魔法少女ピンキーウィングって名乗りなさいって……さっきは魔法少女って言ったけど本当は嫌なの！！１４歳にもなって魔法少女でしかもあんな恥ずかしい格好でなんて！！」

『相当鬱憤が溜まっておるようだの』

「はあはあはあ……はっ！？」

ようやく我に返った桃子。

「大変だね西さん」

「うううう……えっと」

桃子はコホンと一つ咳払いをし立て直す。

「ま、兎も角。でね青君にはこの事を黙っててて欲しいの」

「解った」

「ありがとう青君。でも信じて貰えるとは思えなかったよ」

「最近僕の身にも非常識な事が起きてね。ほれ喋ろよ」

「青君何を……」

『初めましてだのモモコ嬢よ』

「……え？ブレスレットが？え？え？」

混乱する桃子に青はグルバァニアと出会った時の事を話す。

「そんな事があるんだ。不思議……」
桃子は感心したよう言った。

「良ければ西さんがこれ使う？何かこの聖剣血に飢えてるみたいだから」

『我を呪われた武器みたいに言うな』

「でもグルバァニアさんの持ち主は青君なんでしょ」

「違う。僕はこれを使う気なんか無いから持ってっていいよ」

「でも……」

『まあ待て、誰もが我を使える訳ではないのだ。確かめるとしよう』

ブレスレットが眩い光を発すると姿を大剣へと変える。

『さあモモコ嬢よ、我を持ってみるが良い』

「う、うん」
桃子はグルバァニアに言われた通り柄を掴み床に突き刺さった大剣を抜こうとする。

「う～！！……駄目、ビクともしない」

桃子は力一杯引き抜こうとするが大剣は全く動かない。
『ふむ。残念じゃがモモコ嬢には我を扱う事は出来ないようじゃ』
「ちっ」
『アオよ舌打ちが聞こえたぞ』
「青君は持てるんですか？」
『そう言えば試した事が無かったの。アオよ持ってみよ』
「断る」
ガンッ！！
『おわぁ！？』
青が大剣を蹴るとバタンと倒れてしまう。
「さっ教室に戻ろうか西さん」
「え？でも…」
『待たんかコラ！！せめて立たせんか！！』
「放っておいていいから」
『待てと言うておろうがぁー！！』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5796z/

役に立たない聖剣伝説

2011年12月28日23時53分発行